主催　日本コトバの会
Japan Language Society (J.L.S.)

第１２回 表現よみフェスティバル

「記号づけ」で表現力を高めよう！

「記号づけ」で解釈⇔表現力を高めよう

「音読」が脳のはたらきを活性化すること、黙読とはちがった作品の味わい方があることは、常識になりつつあります。しかし、文学作品のよみ方についての議論はまだまだこれから深めなければならないようです。

当会では1956(昭和31)年から「表現よみ」という名称で文学作品(おもに小説)の音声表現の研究をつづけてきました。1994年からは全国に呼びかけて「表現よみコンテスト」を開催し、2000年まで通算７回を重ね、2001年からはより広い分野の方がたが参加できる「表現よみフェスティバル」としました。

今回は3部構成で、当会事務局長・渡辺知明が著書『朗読の教科書』(2012パンローリング社)の中から特に「記号づけ」について表現よみとの関係でお話しをします。第2部は、活動弁士—無声映画の解説の活動をしている麻生八咫(あそう・やた)さんによる活弁のパフォーマンスです。そして、第3部は、「記号づけ」グループ学習です。文学作品によく見られる長くて複雑な文を記号づけによって読み解いて、実際に声に出して読んでみようというコーナーです。

「記号づけ」は、表現よみ上達に欠かすことのできない、作品のどこをどのように音声化したらよいのか、だれにでもよくわかるようにする方法です。「記号づけ」には文法的直観がはたらきます。表現よみで脳のあらゆる部分が活性化されますから、表現よみ上達を通してコトバの総合的な力が高められます。

参加者全員にグループでの「記号づけ」の勉強に参加していただいて、その後、参加者のよみで発表会を開きます。わかりやすく楽しく学べます。みなさま大ぜいお誘いあわせのうえ、おいでになり、お楽しみください。

実行委員長　下川　浩

プログラム

あいさつ　　会　長　下川　浩

1　講演「記号づけによる表現よみ上達法」渡辺知明
——著書『朗読の教科書』を基礎を解説——

2　活弁パフォーマンス　活弁士＝麻生八咫(やた)
——活弁「瞼の母」(70分) 上映と語り——

3　小グループによる「記号づけ」の実習
——文学作品の長文の理解と表現法——

＊

●と　き：2012年１２月１日(土)午後1時～5時
●ところ：獨協大学/６棟１階多目的教室
(東武伊勢崎線「松原団地」駅下車徒歩10分)
●資料代：５００円(学割３００円)

※お問い合わせは、下記の日本コトバの会事務局に。

◎文学作品の長い文

①「私達の乗った汽車が、何度となく山を攀(よ)じのぼったり、深い渓谷に沿って走ったり、又それから急に打ち展(ひら)けた葡萄畑の多い台地を長いことかかって横切ったりしたのち、漸(や)っと山岳地帯へと果てしのないような、執拗な登攀(とうはん)をつづけ出した頃には、空は一層低くなり、いままではただ一面に鎖(と)ざしているように見えた真っ黒な雲が、いつの間にか離れ離れになって動き出し、それらが私達の目の上にまで圧(お)しかぶさるようであった。」堀辰雄「風立ちぬ」

②「そんなことをしずとも、町屋の娘と同じに、裁縫やお琴の稽古でもしていれば、立派に年頃の綺麗な娘で通して行かれる養家の家柄ではあったが、手頭(てさき)などの器用に産れついていない彼女は、じっと部屋のなかに坐っているようなことは余り好まなかったので、稚(おさな)いおりから善く外へ出て田畑の土を弄(いじ)ったり、若い男たちと一緒に、田植に出たり、稲刈に働いたりした。」徳田秋声「あらくれ」

③「台所で、何もせずに、ただのっそりつっ立っている姿を、私はよく見かけたものであるが、子供心にも、うすみっともなく、妙に疳(かん)にさわって、おい、お慶、日は短いのだぞ、などと大人びた、いま思っても脊筋の寒くなるような非道の言葉を投げつけて、それで足りずに一度はお慶をよびつけ、私の絵本の観兵式の何百人となくうようよしている兵隊、馬に乗っている者もあり、旗持っている者もあり、銃担(にな)っている者もあり、そのひとりひとりの兵隊の形を鋏でもって切り抜かせ、不器用なお慶は、朝から昼飯も食わず日暮頃までかかって、やっと三十人くらい、それも大将の鬚(ひげ)を片方切り落したり、銃持つ兵隊の手を、熊の手みたいに恐ろしく大きく切り抜いたり、そうしていちいち私に怒鳴られ、夏のころであった、お慶は汗かきなので、切り抜かれた兵隊たちはみんな、お慶の手の汗で、びしょびしょ濡れて、私は遂に癇癪(かんしゃく)をおこし、お慶を蹴った。」太宰治「黄金風景」

日本コトバの会事務局

〒141-0022 東京都品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.０３－３４４５－６４９９
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/